

揺れる路地

岡野弘樹

深夜。午後十一時三十分、月が出ていた。生後十六年になる老犬ゆうたは暗く入り組んだ路地の入口で一瞬立ち止まり、乾いた目でぼくを振り返った。暗い路地は縦横斜め、あらゆる方向に伸びていて、さながら古代の洞窟の様相を呈しているのだ。ぼくはその路地を明るい昼間にも見た記憶がなかったし、ゆうたも同じなのだろうか、耳をびたつと伏せ鼻の奥で怯えた声で陰気に啼いた。妻にひたすら懐いていたせいも、妻ががんで死んでから一層衰えた。ぼくが餌を持っていてもまともにも反応しない。艶のない毛が皮膚にはりついたようにみすばらしいのは、妻が死んでからだと、とぼくは自らを納得させた。ときには咬むこともあった。何を勘違いしたか、すり減った牙を瘦せたぼくの腕に食い込ませたりした。しかし、どちらかといえればほとんど友好的な態度を見せているのだ。

今、見たこともない巨大な路地の深い闇の入口に立って、彼の機嫌はどちらに転ぶかヤジロベエの人形のように心細いのだった。

さつきまで濃く濁ったように輝いていた月の光は路地にはない。風も少しは吹いていたはずなのだが、今、空気の流れは完全に止まっている。まるで真空地帯だった。しかし、呼吸ができることが有難い、とぼくはなぜかひどく敬虔な気持ちで考えた。ゆうたは路地の出口を見つけられずに鼻を路上に押しつけるようにしながら不安げにさ迷っているのだろうか。

今の家に引越してきた寒い冬の夜、ゆうたとともに散歩に出かけたのだが、二時間くらいあちこちさ迷ってようやく我が家を見つけたとき、門の前で妻が寒そうに肩をすくめて立っていた。

そして今、我が家を見つけたとしても門の前で待つ妻はいない。

そのときゆうたがぼくの前を横切った。今度はさつきよりやや狭い暗がりに尻尾を振りながら駆け込んで行った。ぼくはふと腕の時計を見たが見えなかった。暗がりの中でゆうたと呼ぼうとしたが唇は乾いていて声さえ出すことができない。

ゆうたが尻尾を振りながら飛び込んで行った路地に、ぼくは意を決する気持ちで踏み込んだ。

急に風が出てきた。落ち葉が雪のように舞っていた。

そこは墓地であった。無数の墓石が乱立しているのがわかる。そうだ、妻の墓を長い間訪れたことがなかった、と

月は黄色い光を地上に広々と撒き散らしていて、ゆうたとぼくの影が交錯しながら揺れているのだ。

妻は息を引き取る瞬間、色のない唇を震わせながら、ゆうた、とつぶやいた。ガレージの隅で寝そべっているゆうたは妻の死の場に立ち会ってはいないし、ぼくがそう話してみても恐らく理解はしないだろう。

ぼくはゆうたの鎖をはずしながら路地の暗闇を覗き込んだ。何かが動いたような気がした。ゆうたも見えていたのだろうか、それまでにない若々しさを背中を幾分そり気味にし、四肢を突っ張っている。

鎖が外れると同時にゆうたは体を斜めに傾け全身の毛を逆立てたまま、猛スピードで路地の奥に消えていった。ぼくの心もゆうたと同じようにはやっているのだ。数十年前の血沸き肉躍る精神と肉体を取り戻せたような気がしていた。

ぼくはゆうたを追うようにして路地に駆け込んだ。瞬間闇が網膜全体を覆い、車が急ブレーキをかけたみたいに全身が前のめりになった。

ゆうたの姿は闇の中にはない、当然だろう。若々しさを取り戻したゆうたは暗い路地を転びそうになりながら駆け回っているに違いない。

ゆうたも私も、路地の奥に何を見たのだろう、ふとなぜか急に不安になった。

ふと思った。月光がすべすべした墓石のてっぺんに反射し、なめらかな御影石全体がかすかに揺れているように見えただ。

ゆうたの甘える声が聞こえた。一番大きい墓の陰に荒い息を吐きながら背中をそらせて座っていた。

広大な墓地は、かなり遠くずっと先まで続いていて、墓石と墓石の間の土は地下水でもしみだしているのかとてもふんわりしていて柔らかなのだ。

ぼくは何気なく振り向いた。巨大な路地がすぐ目の前まで迫ってきていた。連棟住宅のかたまりは巨大な古代の恐竜のようだった。みしみしと軋みながらぼくたちに向かって、顕かに攻撃的に移動し続けていた。ぼくは、足元から細かい震えが波状的に上がってくるのがなぜか不思議に快いのだ。